首都ビエンチャンを中心とした テキスタイルビジネスとラオス伝統染織

伊藤　渚　　比較人文学専攻・文化人類学専門　前期課程２年

１．調査地概要（地図・表１）

ラオス人民共和国は農業国である。手工芸，中でも，手織物は，農業以外で最も盛んな産業のひとつであり，主要な輸出品である。かつて家族のために織られていたラオスの手織布は，90年代以降急速に市場化した。しかし，女性によって営まれ継承されてきた染織活動は，布が商品化した今も，生産から販売まで，主にラオ＝タイ系諸族の女性によって担われている。

昨年度「人文学フィールドワーカー養成プログラム」の採択を受けて行った調査により，現在のビエンチャンを中心としたラオスの手織物産業は，「地方－ビエンチャン－外国」というネットワークを形作っていることがわかった。ビエンチャンでは，知識階層に属する工房オーナーが，外国からの眼差しと需要を受け止め，天然染色や手織をラオス伝統染織の重要な特長だとみなし自覚的に採用している。一方，地方からは原材料や織技術を持った織手が供給され，工房の生産を支えている。実際，工房で働く織手の多くは地方出身者であり，給与は出来高払いで，勤続年数の多い者も半数を占めることが昨年度の調査でわかった。

ラオス全国地図

表１　ラオス人民民主共和国

人口	580万人（2006年世銀統計）
面積	24万平方キロメートル
首都	ビエンチャン
民族	低地ラオ族（60％）他，計49民族
宗教	仏教
国語	ラオス語
通貨	キップ（8600kip＝1$（2008年10月））
GDP	１人あたり $390（2004年）

２．調査の目的

本調査の目的は，今まで明らかにされてこなかった現代ラオスにおける伝統染織のあり方を解明することである。これまでの調査内容を踏まえ，織物を製作し，使用し，流通させている人間主体に注目することで，ラオスの人々が市場化・近代化という社会変化にどのように対応しているのか，また，市場化・近代化の中でラオス伝統染織がどのようにあるのか，具体的に解明することを目的として調査を行った。

３．調査の方法

調査期間は2008年９月10日から11月10日で，主にビエンチャン特別市内で調査を行った。他に，９月19日～９月23日にはラオス南部のチャンパーサック県，10月９日～10月12日にはタイ王国スリン県，10月27日～11月４日にはラオス北部のホアパン県で，聞き取りを中心に調査を行った。

ビエンチャン特別市では，１）手織物工房のオーナーからの聞き取り調査，２）工房ＰとＨ職業訓練センターで働く織手からの聞き取り調査，３）市場の布商

人からの聞き取り調査，4）ビエンチャン近郊で織物をさかんに行っている2村・N村とW村での聞き取り調査，以上4点を行った。

ビエンチャン以外での調査ではラオス北部のホアパン県では織手の出身村の様相を知ること，ラオス南部チャンパーサック県とタイ王国スリン県ではビエンチャンで出会う織手の多くの出身地であるラオス北部との手織物製作の様相の比較を行うこと，をそれぞれ目的として調査した。

〈工房Pの概要〉

ビエンチャン市中心部から4 km北上したN村に工房がある。オーナーはタイデーンの姉妹（K・B）である。彼らの母はホアパン県M. O村出身で，1964年に戦火を逃れビエンチャンに出てきた。以来，母親と姉妹は織物で生計を立ててきたという。

姉妹は，大学卒業後の1993年，商品の輸出許可を得るため工房Pを創設した。当時は，織手2，3人の小さな工房だったが，2008年現在，約120人の工房織手と約130人の在宅織手，26人の男性従業員を抱える，ビエンチャンで最も大きな工房となっている。工房には毎日のように観光客が訪れ，大型バスでやってくる団体もある。

年間の売上は約30万ドルで，売上の95％を輸出が占める。輸出のうち，70％を占めるのは日本である。

4．調査の結果

調査の結果，以下のことが明らかになった。

1）手織物商品化の経緯にはラオス特有の歴史的事象が反映されていること。

2）織物の産地として知られている「サムヌア」を中心とした北部地方一帯には母から子へとうけつがれている手織の文化が存在すること。

3）市場で売られているシン，ディンシン，パビアンや，それに合わせる上衣といったラオ＝タイ系諸族の民族衣装を買うのは，主にラオス人であること。特に近年増えてきた都市部の中流階級や富裕層は手織布の主要な購買層であること。

4）手織物産業の担い手は，工房オーナーら商人企業家と，村や工房で織物をしている一般の織手の，2層構造になっている。しかし，その双方とも，手織文化の継承者であり，また親族の網の目の中で互いに助け合って生きてきたラオス人であるという点で共通している。現在のラオスの手織物産業は，このような複雑な状況の中で成立しているといえること。

5）ラオス南部やタイ王国イサーン地方の南部はカンボジアと国境を接し，クメール文化の影響を受けた，ひとつの文化圏を形成しているが，その染織文化にはビエンチャンやラオス北部と共通するものが多いこと。その一方で，ラオス南部はビエンチャンを中心とした現在の手織物産業の一部に組み込まれていること。

1）手織物商品化の経緯

聞き取り調査により，ラオスの手織物の商品化は以下のように進んだことが明らかにできた。

・第一期：第二次世界大戦後から社会主義革命（1960～）：アメリカ軍の爆撃を逃れて，革命勢力の本拠地のあったシェンクワン・サムヌア地域から人々が難民として流出，各地に移り住んだ。このことが，「サムヌア」の織物が有名になる最初のきっかけとなった。また，1975年の社会主義革命以後は，国を閉じたために，生活の必要から手工芸のバックラッシュが起こった（Cheesman・2004）。

・第二期：市場開放後（1986～）：各種の手工芸振興プロジェクトや海外向けの手織布の生産がはじまった。また，コレクターによるアンティーク布の買占めにより，村からアンティークの布がすべて消えたのもこの時期である。こうしたアンティーク布の流出により，ラオス，特に「サムヌア」を中心とした北部の織物が世界に知られるようになった。

・第三期：経済発展の進展（1996～）：布の商品化が急速な進行し，サムヌアで織られた布がはじめてビエンチャンの市場に出回るようになった。つまり，地方の織物がビエンチャンの市場で盛んに売られるようになったのは，アンティークが村から全て失われた後の90年代の末からである。

2）「サムヌア」[1)]と伝承される手織の文化

「サムヌア」は織物の産地として，海外でもよく知られている地域である。また，ラオス人の間にも，「サムヌア」人といえば，織物をする人たちだという認識がある。この「サムヌア」と呼ばれるホアパン県一帯から隣県のシェンクワン県にかけての地域は，織物の盛んな地方としてラオス内外で知られているといってよい。

実際，筆者が聞き取りを行った工房織手46人のうち，ホアパン県出身者は22名と全体の48％を占めていた（図）。また，ビエンチャン県出身の織手が10名

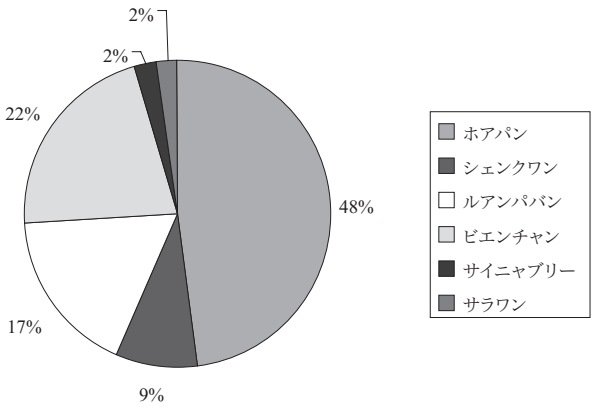

図　工房織手の出身地

いたが，そのうち８名は両親がホアパン県もしくはシェンクワン県の出身者であった。ルアンパバン県にも内戦時にホアパン県から移住した人々の住む村があり，同県出身者のうちの何人かはそうした村の出身だとのことである（工房Ｐオーナー談）。つまり，全体の80％程度はシェンクワン・サムヌア（ホアパン）の関係者が占めているといえる。

今回の調査では，ビエンチャン市内で織物をさかんに行っているＮ村とＷ村でも聞き取り調査を行った。その結果，これらの村々には，戦争～革命期にシェンクワン・サムヌア（ホアパン）から移住してきた人々がいること，現在も彼らの親族が同地方から断続的に入ってきていることがわかった（表２・３）。村で織っているのは，主に，ディンシン，パビアン，シン（写真１・２）などで，いずれもタラート・サオ（朝市）に卸している。

さらに，今回調査では，ビエンチャンに住む織手の出身地であるホアパン県へ行くこともできた。その結果，ホアパン県のラオ＝タイ系諸族の女性たちは，母親から織の技術を習い，商業ベースに乗らずとも，日常生活の中のごくあたりまえの活動として織を行っていることがわかった。

「サムヌア」の女性たちにとって，織物は，女性であれば誰もがする，たしなみのようなものである。女の子は，大体，10歳くらいから織物をはじめる。最

表２　Ｎ村

名前	性別	年齢	民族	宗教	出身			移住した年		帰郷	
					県	郡	村	ビエンチャン	Ｎ村	回	年
リアン	F	51	タイデーン	精霊信仰	ホアパン	ホアムアン	M.O	——	1996		
イアン	F	44	タイデーン	精霊信仰	ホアパン	ホアムアン	M.O	——	1990頃		
バーオ	F	44	タイデーン	精霊信仰	ホアパン	ホアムアン	M.O	——	1992	3	
ピット	F	46	タイデーン	精霊信仰	ホアパン	ホアムアン	M.O	——	1992	0	——
ブアポン	M	63	タイデーン	仏教	ホアパン	ビエンサイ	T	1969	1986	1	2005
メーエー	F	49	タイデーン	精霊信仰	ホアパン	ビエンサイ	T	——	1993	1	2005
セーンラム	F	45	低地ラオ	仏教	ビエンチャン	ハートサイフォーン	S	——		—	——
(夫)	M		タイデーン	精霊信仰	シェンクワン	ムアンカム		1970	1992	0	——
トン	F	60	タイデーン	精霊信仰	ホアパン	ホアムアン	M.O	1967	1980	4, 5	
ラー	F	46	タイデーン	仏教	ホアパン	ホアムアン	M.O	1968	1987	1	2002
ジャン	F	60	タイデーン	仏教	ホアパン	ビエントーン	M.B	1950	2005	0	——
トゥム	F	60	タイデーン	仏教	ホアパン	ホアムアン	M.O	1975	1975	0	——
カムパン	F	40	タイデーン	仏教／精霊信仰	ホアパン	ホアムアン	M.O	1964	1966	1	2005
マイ	F	50	タイデーン	精霊信仰	シェンクワン	ムアンカム	N	——	1992	1	2007
ノンカム	F	55	タイデーン	仏教／精霊信仰	ホアパン	サムヌア	V	1969	1986	0	——
B※	F	42	タイデーン	仏教／精霊信仰	ホアパン	ホアムアン	M.O	(1964)	1987	0	——

※工房Ｐオーナー

表３　Ｗ村

名前	性別	年齢	民族	宗教	出身			移住した年		帰郷	
					県	郡	村	ビエンチャン	Ｗ村	回	年
バンペーン	F	52	低地ラオ	仏教	ホアパン	ホアムアン	C	——	1991	1	2005
ティンカム	F	45	低地ラオ	仏教	ホアパン	サムヌア	K	——	1969	0	——
ヴィオンサー	F	33	低地ラオ	仏教	ビエンチャン	サイタニー	W	——	——	0	——
ブンミー	F	30	低地ラオ	仏教	ビエンチャン	サイタニー	W	——	1978	0	——
ワンカム	F	31	低地ラオ	仏教	ルアンパバンル	アンパバン	J	——	1988		
ウォン	F	49	低地ラオ	仏教	ホアパン	ホアムアン	M.P	——	2008	0	——
ワンセーン	F	26	低地ラオ	仏教	ホアパン	サムヌア	M.W	1998	2007	1	2007
イン	F	66	低地ラオ	仏教	ホアパン	サムヌア	K		1978	0	——
アンポーン	F	36	低地ラオ	仏教	ホアパン	サムヌア	K	——	1972	0	——
トンカム	F	33	低地ラオ	仏教	ビエンチャン	サイタニー	W	——	(1960)	0	——

写真１（托鉢）

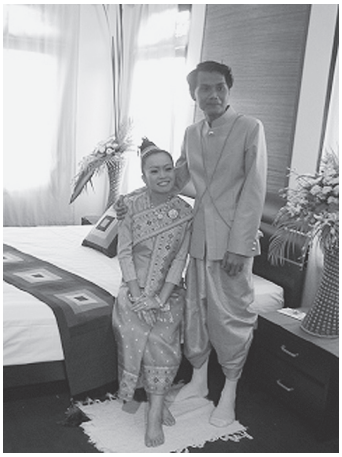

写真２（新郎・新婦）

写真３

写真４

初はまずディンシンを織る。次に，パー・ホム（毛布）を織る。こうした過程を通して，整経，経糸のセッティング，ゲップラーイ（模様を拾う）（写真３），ジョック（緯浮織）（写真４）などの基本的な技法を学ぶ。織物のウデマエは，その人自身の評価にも結びつくため，彼女たちは，織物のウデマエについて評価の眼を持っていること，また，自らの織った出来栄えのよい布を売り払わずに大事に所持していることもわかった。

このように「サムヌア」を中心としたラオス北部のラオ＝タイ系諸族の女性たちの間には，母から娘へと受け継がれてきた手織の伝統があるといえる。

３）手織物の購入者

昨年度に調査を行った手織物工房では，顧客の８割以上が外国人であった。彼ら外国人顧客は，素材としてのオーガニックな手織布や，「伝統」的なラオスらしい土産物としての手織布を求める。一方，村に住む織手が織り，市場で売られている手織布の大半は，シン，ディンシン，パビアンや，それに合わせる上衣のといったラオ＝タイ系諸族の民族衣装である。これら民族衣装の主要な購買層はラオス人であることが今回の調査でわかった。

ラオス人は普段からよくシンをはく。近年は，少しずつ洋装を好む人が増えているとはいえ，ビエンチャンでは街中を歩く女性の50％以上が，サムヌアでは90％以上の女性がシンを身に着けている。その理由のひとつは，ラオスの女性たちが職場や学校などの公的な場でシンの着用を求められるという事情にある。もうひとつの理由は，寺への参拝時（写真１）や正式な儀礼への参加時などに正装として求められる衣装がそれだということである。正装時，ラオ＝タイ系諸族の女性たちは，シンを身につけ，シンに合わせた体にぴったりフィットする袖付の上衣を着，「パビアン」と呼ばれる布をたすきがけに身につけ，さらにアクセサリーとして，イヤリング（ピアス），ネックレス，腕輪を身につける（写真１・２）。

このように，ラオス人が買うのは，公的にも私的にも生活上のニーズのある，シン，ディンシン，パビアンや，それに合わせる上衣といった民族衣装である。

特に近年増えてきた都市部の中流階級や富裕層は，手織り布の主要な購買層であることがわかった。

4）手織物産業の担い手

手織物工房のオーナーの大半は，ラオ＝タイ系の女性である。今回の調査により，彼らは，以下のような4つの顔を持っていることがわかった。

(i) 知識とネットワークを生かした商人企業家である。

彼らは高学歴で，外国語をあやつり，外国人のニーズを理解することができる。そのため，こうした手織物工房では，天然，手紡ぎの素材糸にこだわっており，また，ほとんどすべての工房で天然染色が行われている。価格も高額で，織られた布のほとんどが外国に輸出される。

(ii) 外国に向け文化を翻訳し織物業の発展を主導する者である。

工房オーナーたちは，アンティーク布コレクションを所有し，私設博物館を作ったり，「伝統文化」に関する本を執筆したりもする。また，ラオス手工芸協会や女性同盟などで，手織物の振興を中心になって行っているのも彼らである。

昨年度の調査報告でも述べた以上2点の特徴に加え，彼らはまた，(iii)手織の伝統を受け継ぐ者であり，(iv)親族の網の目の中で，互いに助け合って，様々な困難の中を生きてきたラオス人でもある。

商人企業家である工房オーナーは，工房で働く織手の女性たちや村で織物をしている女性たちと，これら2つ(iii)(iv)の特徴を同じくしており，また，親族関係を通じて互いに結びついている。

(iii) 手織の伝統を受け継ぐ者である。

工房Pのオーナー姉妹の祖母（1984年死去）と母（2006年死去）は，ともに，織物が上手なことで知られた人物であった。また，工房Pにかぎらず，成功している工房には必ず織を統括するウデのいい織手がいることが，聞き取りからわかった。

また，聞き取りを行った工房織手46人のうち，36人は，実家で母など親族から織技法を教わり，ビエンチャンに出てきた時にはすでに織技術を習得済みであった。織り技法は主に工房で覚えたと答えた残り10人も，家族内には織技法の保持者がいた。つまり，46人の織手は，いずれも，手織の文化が継承されている村の出身なのである。

ビエンチャン市内のN村・W村では，10歳以上の女性は，ほぼ全員，母親から織技法を教わって習得済であった。また，実家では織物の経験が全くなく，これら2村に嫁いで以降にはじめて織を始めた女性がいることもわかった。

(iv) 親族の網の目の中で，互いに助け合って，様々な困難の中を生きてきたラオス人である。

ラオス語で「ピー・ノーン」と呼ばれる，血のつながりのある親族は，お互いに助け合うべきものとされ，彼らが心から頼りにしているものである。ラオス人は，こうした親族の網の目の中で互いに助け合って様々な困難の中を生きてきたといえる。

工房Pのオーナー姉妹は，両親の出身村であるM. O村はおろか，ホアパン県にさえ一度も行ったことがないという。しかし，工房にはM. O村出身の織手が，筆者が確認した限りで7人いた。また，工房Pの裏手にある20軒の家に住むのは主にホアパン県出身の彼らの親族である。そして，その半数にあたる10家族がM. O村の出身者であることも聞き取りからわかった。

一方，聞き取りを行った工房織手の女性46人のうち，45人はビエンチャンに親戚がいた。織手の女性たちは，そうした親戚を頼って村から出て来るようである。ビエンチャンに親戚はいないと答えたただ一人の織手も，数ヵ月後に工房を再訪してみると，すでに妹を呼び寄せていた。加えて，働きだすきっかけが工房内にいる親戚や知人の存在だと答えた織手が46人中40人と多く，工房内にあるつてを頼って職を探す傾向がうかがえる。

工房Pの裏手に住むN村の20家族がすべて親戚同士であることは先にも述べた。調査を行ったビエンチャン市内のもうひとつの村・W村にも，親戚をたよって断続的に移入者があることが聞き取りからわかった。（表2・3）

5）他地方の手織

今回の調査では，ラオス・チャンパーサック県パクセー近郊のS村と，タイ・スリン県T村にて調査を行った。S村はラオスの南部に，T村はタイのイサーン地方南部にあたる。ラオス南部とイサーン地方の南部は，国こそ異なるが，ともにカンボジアと国境を接し，クメール文化の影響の濃いひとつの文化圏を形成している。これらの地方は，紋綜絖を用いた緯浮の紋織りとともに，絵絣を織ることでも知られている。

両村で用いられている機はともに高機で，ラオス北部と共通している。ラオス南部のS村では，現在，輸入糸と化学染料でシン・ミー（絣織のシン）をもっぱ

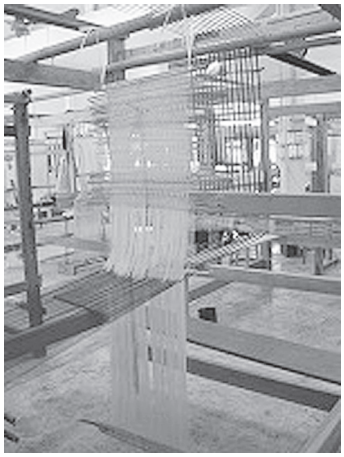

写真５

写真６

写真７

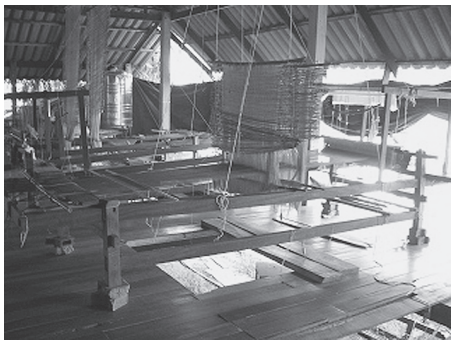

写真８

らに織っている。しかし，少なくとも20年前までは，ラオス北部と同じく，養蚕を行い，カオユン（紋綜絖）（写真５）を用いて行うジョック（緯浮織）やムック（経浮織）でシンを織っていた。スリンのＴ村では，現在も養蚕（写真６）を行っており，絣織とともに紋綜絖を用いた緯浮の紋織りが行われていた。このように，道具・技法からみて，両地域の染織技法は，ラオス北部と共通する部分が多い。しかし，ラオス北部と異なり，両村ではともに，タテに長く糸の巻取に板を用いる機（写真７・８）を使っていた。

現在，ラオスのＳ村で用いられている筬は，すべてビエンチャンで作られたものである。また，織られたシン・ミーの大部分はビエンチャンに運ばれ売られている。このように，Ｓ村は，イサーン地方南部と関連の深い地域ながら，現在では，ラオスの首都ビエンチャンを中心とした手織布の生産・販売・消費のシステムに組み込まれているといえる。

５．ま と め

手織物の商品化は，1960～70年代の戦争と社会主義革命，1986年の市場開放から現在に至るまでの市場化・国際化といったラオス特有の歴史事象の中で成立した。そうした現象の背後には，シェンクワン県からホアパン県地域を中心としたラオス北部のラオ＝タイ系諸族の女性たちが母から娘へと受け継いできた手織の伝統がある。

つまり，ラオスの伝統染織が商品化されていくプロセスにはラオス特有の歴史的事情を色濃く反映されており，ラオス社会に従来からある人的ネットワーク，社会慣行が，手織の伝統とともに，こうした状況を支えているといえる。

注

1）サムヌアは，現在の行政区分では，ホアパン県の県庁所在郡である。しかし，社会主義革命以前の省名であったこと，また，近代的な行政制度が導入される以前から，ホアパン県一帯にはムアン・サムヌアと呼ばれるムアン（国）があったことなどから，ホアパン県一帯は，今でも，一般に「サムヌア」と呼ばれている。

参考文献

赤嶺綾子　2001 「ラオス社会における商業活動：ヴィエンチャン市内の手織物販売業の事例から」『龍谷大学経済学論集』40–5：1–21頁，龍谷大学経済学会：京都。

Cheesman, Patricia 2004 *Lao-Tai Textiles: The Textiles of Xam Nuea and Muang Phuan*. Studio Naenna Co.: Chiang Mai.